

出世を決めるのは能力か学歴か

中央官庁では「東大卒」が威力

春先になると、週刊誌がこぞって出身高校別の難関大学合格者数のリストを掲載する。目を通す人が多いのは、やはり大学受験の成否は人生の一大事だと思っただろう。ただその一方、学歴や学校歴による能力差がさほどあるわけでもないということも、多くの人が日々実感していることではないか。

実際のところ、出身大学によって出世ほどのくらい左右されるのだろうか。実は経済学者は、こうした問題に対しても、科学的なアプローチで解明を進めている。

まず、米学術誌『インダストリアル・リレーションズ』2004年7月号に発表されたスウェーデン・ストックホルム商科大学の小

野浩準教授による研究を紹介する。小野氏は

日本人570人をサンプルに、大学への進学をもたらずかを調べた。サンプルの平均値である偏差値52（旺文社調べ）の4年制大学を卒業した場合、年齢その他の条件を一定にしたときに、高卒で働くのに比べて約30%年収が高いという。さらに、年収がどの程度上積みされるかは、卒業した大学の偏差値によって変わる。偏差値42の大学は高卒より約21%増にとどまるが、偏差値62の大学であれば同約42%も高くなる。

ここで自然に出てくる疑問は、高い偏差値の大学を出た人の年収が高いのは、その大学

の教育内容が優れていたお陰で高い実力を身に付けたためなのか、ということだ。

大学は選別装置か

そうではなく、大学は単に人間を学力ごとに輪切りにする選別装置だから、どこかの大学で何を勉強したかは関係がないという意見もある。たとえば、東京大学に入るくらいの能力のある人たちは、仮に東大に行かなかったとしても、もとより優秀なのだから、いずれにしろ高収入を得ていただろうという仮説である。これを「セレクション（選別）仮説」と呼ぶ。

東大の卒業生が東大を出ていなかったらどうなっていたかを知る術はないので、この仮説の検証は通常不可能である。ただ、それを可能にする歴史的な出来事がひとつあった。

東大は大学紛争のさなか左翼学生にキャンパスを占拠された。そのため、1969年の入学試験を行わなかったのだ。よってこの年東大進学を考えていた高校3年生や浪人生の多くは進路を切り替え、京都大、一橋大、東京工業大などに進んだと言われている。セレクション仮説に従えば、この人たちは普段の京大、一橋、東工大の卒業生よりも優秀なはずだから、68年や70年の入学生よりも出世しているはずだ。この仮説を上海财经大学の馬文傑氏と筆者が検証した。

東大、京大、大阪大、一橋大、東工大、早

よく効く
経済学

身近な？を解く



難関大学の卒業生ほど高収入を得やすいが、それは潜在能力の違いによるのか、大学の教育内容によるのか――。



かわぐち だいじ
川口 大司
(一橋大学大学院経済学研究科助教授)

1971年東京都生まれ。94年早稲田大学政治経済学部卒業。96年一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了。2002年米シカゴ州立大学大学院経済学研究科博士課程修了。大阪大学社会経済研究所講師、筑波大学社会工学系講師を経て、05年から現職。

東大卒業は出世を約束する



補正待ち

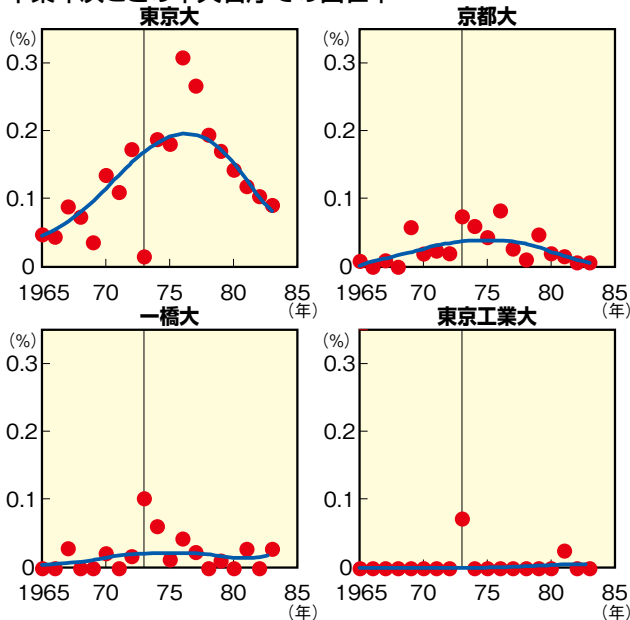
1965～83年の卒業生の部門別出世率

(単位%)

学校名	民間企業の部長以上	中央官庁の管理職	民間+中央官庁
東京大	2.91	13.64	4.01
慶応大	4.44	0.21	3.92
一橋大	3.92	2.11	3.70
京都大	2.91	2.87	2.91
大阪大	2.56	0.29	2.39
早稲田大	2.15	0.08	1.93
東京工業大	1.94	0.63	1.86

(注) 出世率は、民間企業と中央官庁で役職にある人数が各大学の推定卒業生数に占める割合(出所)『会社職員録2002』『政界・官庁人事録2003』『全国大学一覽』『学校基本調査』より筆者と馬文傑氏作成

卒業年次ごとの中央官庁での出世率



(注) 22～23歳で大学を卒業したものに限定
(出所) Daiji Kawaguchi and Wenjie Ma "The causal effect of graduating from a top university on promotion: Evidence from the University of Tokyo's 1969 admission freeze," forthcoming in *Economics of Education Review* より抜粋

稲田大、慶応大の7校を対象に、民間企業と中央官庁で幹部になった人数を卒業年ごとに数えた。具体的には、民間企業は『会社職員録2002』(ダイヤモンド社)から、東証1部上場で資本金5億円以上の企業で部長級以上、中央官庁は『政界・官庁人事録2003』(東洋経済新報社)に載っている幹部を出世の目安とした。

ただ、大学ごとに定員や学部構成が大きく異なるため、文部科学省の『全国大学一覽』と『学校基本調査』から、卒業後に民間企業や官庁や企業で働いていると思われる推定卒業生数を計算。先ほどの定義で出世を果たした人数をこの人数で割り、学校ごとの「出世率」を導き出した。(表)

意外なことに、東大卒の民間企業での出世率はさほど高くなく、慶応や一橋が優勢である。その一方で、中央官庁における東大卒の出世率は他大学を圧倒している。それでは、中央官庁での東大卒の圧倒的な出世率が、最難関の大学に合格したという彼らの能力によって説明できるのかを見てみよう。

図は卒業年次ごとの出世率を示したものである。73年卒の京大、一橋、東工大卒業生の中央官庁での出世率は、前後の年よりも高くなっており、特に一橋、東工大でその傾向が顕著だ。東大卒業生が中央官庁での出世するのは、能力のある人が集まるからで、そうした人は東大の募集がなくて他の大学へ行ってもやはり出世しているといえ、一見、セレクション仮説の正しさを示しているかに見える。

「73年東大卒」の穴

しかし、問題はその効果の大きさである。「消えた73年東大卒」の中央官庁幹部の人数を例年の出世率から推定すると約35人となるはずだ。その一方、73年の京大、一橋、東工大卒業生が例年の出世率を超え、実際に追加的に埋めたポスト数は14人だった。これに阪大、早稲田、慶応を含めても結果はほとんど変わらなかった。すなわち、東大卒の不在で空いたポストのうち、他大学卒は半分も埋めておらず、残りは他の年代が占めたとみられる。この事実は、例え元々は同じ能力を持った人であっても、東大を卒業することが中央官庁での出世には重要であると示唆している。

東大を卒業することの価値には、エリート官僚としての資質を育てる教育内容もあるだろうし、そのほかにも東大卒業生のネットワーク(学閥)が出世に役立つということもあるだろう。さらに付け加えれば、東大という環境が官僚志向を高める効果があるのかもしれない。逆に同じ人が一橋や慶応に行ったら商社や銀行こそが国を動かす仕事だと思ってしまうのかもしれない。「在野精神」を標榜する早稲田に入るとマスコミ志望になる可能性もある。これらの要素をひっくり返して東大へ行くことが、その人の官庁での出世を助けるといえる。

単純なセレクション仮説が否定されたということは、大学が単なる偏差値による選別の装置ではなく、それぞれの歴史や伝統に由来する特徴を持った存在であることを示唆している。行政による大学評価に当たっても、大学の多様な価値を十分に汲み取る努力が必要だろう。